

Give Me Death
1934
by Isabel B. Myers

目次

疑惑の銃声

5

訳者あとがき 318
解説 阿部太久弥 320

主要登場人物

- ジャーニンガム（ジェリー）……………劇作家
マクアンドリュウ（マック）……………ジャーニンガムの助手。本編の語り手
ゴードン・ダーニール……………ブルーデンシャル信託銀行の社長
ステイヴン・ダーニール……………ゴードンの息子
アンドレア・ダーニール……………ゴードンの娘
フィリップ・ダーニール……………ゴードンの弟
グラント・ベイリス……………ブルーデンシャル信託銀行の幹部。アンドレアの婚約者
シスリー・キャロル……………ステイヴンの恋人
ハロルド・ヤーキーズ……………医師
ハーヴェイ・E・クリテンドン……………信用ローン株式会社社長
クリテンドン夫人……………ハーヴェイの妻
ジェイムズ・キャンベル……………探偵
ロッド・コリンズ……………新聞記者

第一章 午前三時の訪問者

あの事件の幕開けには、ジャーニンガムもほくも不意をつかれた。

当時は十八時間という長丁場、何もかも忘れて脚本にかかりきりだった。サンダーソンが第一稿を船旅に持参できるよう、ジャーニンガムは土曜日の朝までに仕上げると言ったのだ。その約束をしたのはジャーニンガムだ。気をもむのは、例によってこちら。ほくは手を尽くした。彼のアパートメントの玄関ドアに鍵をかけた。ノックしたりベルを鳴らしたりしたらただではすまない、という貼り紙をした。電話機の受話器を外したままにした。脚本が完成しないうちは、ジャーニンガムに用がある人間がイーストリバーに飛び込もうと知ったことじゃない。

あとはタイプライターの前に座り、ジャーニンガムの口述筆記をして、ジャーニンガムが話しかければ耳を傾け、ジャーニンガムが口をつぐめば口をつぐんでいた。また、今は何時かを忘れようとした。ジャーニンガムは天才だから、せかすことはない。

金曜日の昼が過ぎた。そして金曜日の夜が過ぎた。容赦なく、次から次へ、夜更けが入江の暗い水から忍び込み、街を漂い、暗闇に溶け込んで西に向かった。午前一時。二時。三時。

ほくは身じろぎせず、ジャーニンガムが中国の絨毯の端から端まで何度も行ったり来たりするのを眺めた。五歩進む。五歩戻る。五歩進む。五歩戻る。五歩進む。五歩戻る。

疲労という小悪魔たちがこぞつてぼくの背筋に熊手ビツチヤウキウを突き刺す。左足はしびれている。煙草入れは空っぽだ。それでも、ぼくはニューヨークにいるどんな人間とも仕事を交代しなかっただろう。

五歩進む。五歩戻る。

「ちくしょう、ダーリン！」ジャーニンガムはふとグランドピアノに向かって言った。

ジャーニンガムは絨毯の端に着くと折り返した。

「なぜ初めから——」

ジャーニンガムは反対の端で振り向いた。

「あしなかつた？」

ジャーニンガムは一步目と二歩目のあいだで急に立ち止まった。「幕！」

やせて物憂げな百八十五センチの長身から、ジャーニンガムは少年のように得意げにはほえみかけた。

ぼくはタイプライターで最後の言葉を打ち、用紙を引き抜いて、それまで抜いた分の上に放り投げた。次に時計を見た。

「終わった——六時間も早く！」ぼくは言い、煙草を探して机の中を引っ掻き回した。「ありえませぬね、ジェリー。一幕抜かしたか何かしたでしょう」

ジャーニンガムは含み笑いをした。

「批評家連中は同意見だろうな、マック。だが、わたしの知る限りでは全幕揃っている。あとは仕上げをするだけさ」

「やっぱり何かあったんだ。これから夜が明けるまで——ええと——仕上げをするんですね」

「しない！」ジャーニンガムが言い返す。「それはそのままサンダーソンに届ける。もう今夜は何も考えない——誰の頼みでも。わたしは寝る！」

ジャーニンガムは長い両腕を天井に伸ばして悠然とあくびをした。

「次回はだな、マック、もう少し早く早く仕事にかかれば早めに終わるとか言わないでくれ」

「ぼくがいつそんなことを言いました？」ぼくは食ってかかった。見上げると、ジャーニンガムのくぼんだ灰色の目がきらめいていた。

「言ったことはない。しかし、きみはいつもそう思っている。おまけにいつも——百パーセント——正しい」

ジャーニンガムはまたあくびをした。

「ただし」彼はしつこく言った。「わたしは好んで午前三時に仕事をする。この時間だけは静かに過ごせるからね。いくらこのいかれた町でも、午前三時以降に事件が起こったためしは——」

ジャーニンガムはその先を言わなかった。誰かが玄関のドアをコンコンと叩いている。ぼくたちはまさかと思ひ、耳を澄ました。音がびたりとやんだ。ジャーニンガムがげげんそうに眉を吊り上げた。

「今の聞こえたかい？」

ぼくに超能力はない。救いがたいほど現実的だと、ジャーニンガムに言われることもある。それにもかかわらず、そのノックの音は気に入らなかつた。でも、そうは言えない。

「誰かがよっぽど楽しくやってきたんですよ」さらりと答えた。「で、帰る家を間違えた」

ぼくは玄関ドアに向かった。ジャーニンガムがすばやく手を出して、ぼくを引き止めた。

「聞け」彼は声を押して殺して言った。

またもやいまいましいノックの音が、静かな部屋にドラムロールのように響き渡った。

「あの叩き方は酔っていない」ジャーニンガムがてきぱきと答えた。「速すぎて——強すぎて——規則正しすぎる。あの人間はしらふだよ」

「じゃあ、何者のつもりでしょう？」

「本人に訊いてみよう」

ジャーニンガムはぼくを追い抜いて玄関に着き、ぱつとドアをあけた。

すると、すばやい大股の一步で、しらふの男が入ってきた。

ぼくが真っ先に見たのは男の目だ。きらきらした落ち着きのない目。男は、ジャーニンガムとぼくとりビングルームの見える部分を急いで見渡した。その探るような目で何を見つけたのか、見つけなかったのかは知らないが、男の態度が少しやわらいだ。彼は帽子とオーバーを脱いで手近な椅子に載せ、明るいとこへ進み出した。

「ぼくを覚えてませんよね」

だが、それは男の勘違いだ。四角い顔、頑固そうな顎、額の上で逆立っている薄茶色の短髪——。この組み合わせは忘れがたい。ぼくたちが前回出会った陰惨な事件に負けず劣らず。嫌な予感がして、うなじに鳥肌が立った。

「きみはコリンズだね」ジャーニンガムは穏やかな声で言った。「この前、きみが——」

ジャーニンガムはひと息ついて言葉を選んだ。

「どうぞ遠慮なく。何を言われても平気ですから」コリンズが屈託のない顔で口を挟んだ。「この前ぼくが押しかけたときは？」

「押しかけた」ジャーニンガムは頷いた。「あのときは殺人の用件だったな」

「そうでしたね」コリンズはそこそ満足した様子を見せた。

「どうしても表沙汰にしたいくない殺人で、きみは招かれざる客だった」

「新聞記者はめったに歓迎されません」コリンズがもつともなことを言った。

「それから、きみとは取引した覚えがある。わたしが話した——というより、ここにいるマックが話した——とおり、きみが望むものはなんでも——」

「もうほとんど手に入れました」

「きみがほとんど手に入れたのは間違いだった！ その代わり、今後は顔を出さない条件をのんだじゃないか」

「お出入り禁止期間は終わりです」コリンズは言った。「聞いてませんかねえ？」

それは軽口だった。度を越していた。暗い水に張った碎けやすい氷だった。

「たとえ聞いていたとしても」ジャーニンガムはぶつさらぼうに言った。「なんの用があつて午前三時にうちのドアをノックしたんだね？」

コリンズは首をかしげた。

「ぼくに訊いてるんですか！」いかにも驚いたという口ぶりだ。

突然、コリンズはつかつかと歩いてリビングルームへ入り、ゆっくりと回れ右をした。そしてぼくの部屋着のジャケットとジャーニンガムの皺だらけのツイードの上着を見た。再び口をひらいたとき、声に不安な響きがあった。

「用件は知ってるでしょうに」コリンズはけんか腰だった。「あなたは起きていて——服を着ている。」

寝てなかったんだ」

「寝ていたはずだったさ——今ごろは！」ジャーニンガムは苦々しげに言った。

だが、ほくはジャーニンガムの目の奥のほのかな光に気がついた。けだるい態度の陰で、彼はコリンズの一挙手一投足を見つめている。

その若い男は中国の絨毯の真ん中で足を踏ん張り、首をかしげ、困惑したように眉をひそめていた。「どこがおかしいですよ」コリンズは文句を言った。「どうして彼はあなたに電話しないんです？ だいいち、彼からの電話がなかったなら、なぜあなたは起きてるんですか？」

ジャーニンガムはため息をついた。

「誰もわたしが——たまには——仕事をすると思わないらしい」

「この時間に？」コリンズが疑わしげに訊いた。

「いかにも。この時間は」ジャーニンガムは例の悠然とした笑みを浮かべて説明した。「ありがたいことに邪魔が入らないからね」

コリンズはにやりとした。ちよつと申し訳なさそうに、頑固な薄茶色の髪を撫でつけた。髪の——
ついでに自分の——
図々しさを押さえつけようとしたのか。

「すみません！ あなたは身なりがきちんとしたもので——徹夜していた割に。ただ、ちよつとわからないのは——」

コリンズは重い足取りで机に近づいて、タイプライターや散らかった原稿や電話機を眺めた。

「ぼくの勘違いでした。ちゃんと仕事をしてたんですね。いつから受話器を外してあるんです？」

「十八時間くらい前かな」ぼくは答えた。

コリンズの目に勝利の輝きを見て、今の質問に答えてよかったのかどうかと考えた。

「それで辻褄つじつまが合う」コリンズは言った。

彼は大きな椅子のひとつに歩み寄り、いかにも居座りそうなくぐさで腰を下ろし、煙草の箱を取り出した。

「煙草は？」コリンズが箱を差し出す。

「パイプをやる」ジャーニンガムは答える。

ジャーニンガムも机の角に無造作にもたれかかり、愛用のブライヤーのパイプにのんびりと刻み煙草を詰めた。こちらはのんびりした気分ではなかった。

「思うに——」ほくは切り出した。

「こいつに事情を説明させるべきだと？」コリンズが言った。「そりゃそうだ。でも、ほくは説明しない。悪しからず！」

ジャーニンガムはパイプの煙越しにコリンズを温かく見つめている。

「詫びることはない。きみは洗いざらい話してくれた」

コリンズはぎくりとしてジャーニンガムを睨んだ。

「ああ、話しましたよ！」

ジャーニンガムは頷いた。

「どうせ記事のネタを追っていたんだらう。特ダネをつかんだがおじゃんになったな。さもなければ、朝になってから来たはずだ」

「凶星ですよ」

「一面の記事だね。つまり、一面を飾っていたであろう記事だ——きみがものにできていたら」
ジャーニンガムはコリンズの顔を見つめていた。

「しかし、きみは失敗した。どういうわけか」

ジャーニンガムの突き出した眉毛の下できらめく光が見えた。

「おおかた放り出されたんだろう」

コリンズの顔が曇った。

「そうかもしれません」

「そこでここへ来た。わたしが知らせを聞いていると踏んで。だから一度も誘導尋問をしなかった」
ジャーニンガムはパイプの煙でゆうゆうと輪を作った。

「きみはわたしが答えないのを知っていると見える。すると、ただの一面記事じゃない。極秘のニュースだな」

コリンズの顔に初めて不安の影がよぎった。

「そのニュースにはわたしではなく、わたしの友人がかかわっている」

「どうしてそんな見当をつけたものやら！」コリンズが噛みついた。

「ついさっき、きみはわたしが何も知らないと確信した。その一件がわたし自身に影響を与えるとしたら、きみはあの時点でわたしに飛びついただろう。こちらの出方をうかがうためだ」

「おそらく」

「ところがそうせず、きみは口をつぐんで——腰を下ろした。だから、書いている記事の最新情報がここで入手できると見込んだ」

イザベル・B・マイヤーズのふたつの顔

阿部太久弥（湘南探偵倶楽部）

一、ミステリ作家としてのマイヤーズ

歴史の授業に「もし」は使うものではないとされています。すでに史実はあるのですから、「もし、
くだったら……」と、実際には起きなかつたことを追究しても意味がないということですね。

しかし、ミステリ史での「もし」については、つい考えてみたくなります。

「もし、イザベル・B・マイヤーズの『殺人者はまだ来ない』ではなく、エラリー・クイーン『ローマ帽子の謎』が予定通りに、入選していたら……」

一九二八年に〈マクルア〉誌とストークス社が協賛して七千五百ドルの懸賞小説を募集したところ、これに「ローマ帽子の謎」で応募してきたのが、まだ若干二十三歳であったマンフレッド・リーとフレデリック・ダネイの従兄弟同士の二人組、つまり後に黄金時代を牽引するエラリー・クイーンでした。

「ローマ帽子の謎」は入選を果たし、非公式に賞金獲得の知らせが届いたようですが、その直後に

〈マクルア〉誌の版元が倒産し経営者が変わってしまったことで方針も変わり、第一位の座と賞金はマイヤーズの処女長編「殺人者はまだ来ない」に変更されてしまいました。

一九二九年に「ローマ帽子の謎」はストークス社から出版され、後のクイーンの大活躍へと繋がっていきませんが、同じく「殺人者はまだ来ない」も一九三〇年に同じストークス社から刊行されました。

Murder Yet to Come が、「殺人者はまだ来ない」として〈EQ〉誌に訳載された当時、「一九三〇年代に二作のミステリを発表してだけで消えた、経歴不明の謎の作家による、幻の作品。しかもクイーンの『ローマ帽子の謎』と競った末に入選した作品」として話題となりましたが、初めて日本語に訳されたのは、はるか戦前にまで遡ります。

「妖紅石」(井上良夫訳)〈ぶろふいる〉誌 一九三四年十月号〜十二月号(全三回)

『トレント殺害事件』(寺田鼎訳)サイレン社 一九三六年三月刊

『標石荘殺人事件』(寺田鼎訳)アドア社 一九三六年十一月刊

この二冊は題名が違うだけで、中身は、活字の組み方や屋敷内の見取り図まで、すべて同じです。同じ本の改題再刊というのは、戦前にはよくあったようで、サイレン社―アドア社間でも、

エラリー・クイーン 希臘樞の秘密 ↓ 地下墓地の秘密 (伴大矩訳)

ルーファス・キング 白魔の一夜 ↓ 脅迫の恋文 (泉一郎訳)

があります。

それから半世紀近くを経て、

『殺人者はまだ来ない』(山村美沙訳)

〈EQ〉誌 一九八一年九月号〜一九八二年一月号（全三回）

光文社カッパ・ノベルス 一九八三年二月刊

光文社文庫 一九八七年三月刊

電子版 二〇〇一年十二月配信開始

が刊行されています。

「妖紅石」連載の〈ぷろふいる〉は上下二段組、連載分の合計は百十六ページ。「トレント殺害事件」は三百八ページ。単純比較はできませんが、光文社文庫版「殺人者はまだ来ない」四百六十六ページと比べると、どの程度の抄訳であるかの目安にはなりません。

井上良夫氏は、〈ぷろふいる〉一九三四年一月号の『英米探偵小説のプロファイル』で、「妖紅石」の連載に先がけ、次のように紹介しています。

此の「再び起るべき殺人」の出来榮へに就いては、私が昨年の十月から此年の十月までの間に讀み漁つて來た幾多の作品中、最も興味深く讀まされた本格探偵小説として、推賞するに躊躇しない作品である。

効果的な場面の叙述は、直に素晴らしいサスペンスを生み出して、一気に讀み通させるに十二分な魅力を與へる。尙、此の作に強いサスペンスを生ませてゐる今一つの理由は、その題名が示してゐる通り、最初に殺人事件が起り、更にいま一度、同じ犯人による兇行が必ず繰返されるに違ひないといふことを主人公が豫知し、それを阻止しようとしてあせる所に在る。即ち、事件に發展の餘地の充分にあることを最初から讀者に知らせておくのである。

〔著者〕

イザベル・B・マイヤーズ

1897年、アメリカ生まれ。1929年に雑誌社主催の懸賞小説へ募集した「殺人者はまだ来ない」が一位入選となる。作家としては長編二作を発表しただけだが、心理学者としては著名で、カール・グスタフ・ユングの心理学的類型論に基づいた自己理解メソッドMBTIの開発者に携わった。80年死去。

〔訳者〕

木村浩美（きむら・ひろみ）

神奈川県生まれ。英米文学翻訳家。主な訳書に『忙しい死体』、『守銭奴の遺産』、『霧の島のかがり火』（いずれも論創社）、『シャイニング・ガール』（早川書房）、『悪魔と悪魔学の事典』（原書房、共訳）など。

ぎわく じゅうせい
疑惑の銃声

——論創海外ミステリ 212

2018年7月20日 初版第1刷印刷

2018年7月30日 初版第1刷発行

著者 イザベル・B・マイヤーズ

訳者 木村浩美

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1723-1

落丁・乱丁本はお取り替えいたします